

## (2) 平成30年度入学生の1年次から3年次の比較

### 【考察】

全体的に多くの項目において、学年を追うごとに得点が上がっている。特に、学校で直接繰り返して指導ができる項目、「登校時間に合わせて起床し、おおむね決まった時間に就寝する」や「交通機関を適切に使うことができる」といった項目のように、直接は指導できないものの学校生活を送る上で必要であり、繰り返し経験できる項目は、学年を追うごとに得点が上がっている。

また基本的労働習慣の領域では、2年生から3年生にかけて、大きく伸びている項目が多く見られる。これは、3年生になって就職を目前に控えた生徒たちが、より明確な将来の目標を持てるようになったとともに、卒業後をイメージした具体的な指導によって、自信をもって「できる」と評価したものと思われる。

このことから、本校の教育を受けることによって、社会人としての基礎的な力を育てることができていると考えられる。

一方で、学年を追うごとに伸びは見られるものの、3年次においても「ふつうにできる」と評価する3点を下回っている項目がいくつか見られる。健康管理の領域の自己理解に関する項目、日常生活管理の領域の感情コントロールやストレスマネジメントに関する項目、対人関係スキルの領域の発信のコミュニケーションに関する項目、職業適性の領域の作業手順や内容、指導者の変化に関する項目である。そして、対人スキルの領域は、一般的に3点をわずかに超える程度にとどまっている。これらの項目の苦手さは、知的障がいや発達障がいの特性でもあり、この傾向は、過去2年間の結果からも同様のことが見られる。

また、これらの項目は、それぞれが深く結びついている。自分がどんなことで感情が乱れたりストレスを感じたりするのか自己理解し、適切にコントロールすること、自分が苦手なことを理解し、信頼できる上司や同僚、支援者に自ら相談したり、アドバイスを受け入れること、状況の変化をとらえ、自分で考え判断すること、などである。

そして、これらの力を伸ばしていくためには、学校生活のベースに、生徒にとってわかりやすく達成感を味わうことのできる授業、仲間や指導者との良好な人間関係があることが、重要になってくる。落ち着いて安心して学べる環境があることで、自分とじっくり向かい合い、振り返ること、自分の思いを適切な方法で伝えたり、仲間や指導者の思いを受け止め自分の考えを深めたりすること、困難なことがあったときに、投げ出すことなく粘り強く取り組んだり、適切に支援を求めたりすることができるようになると考える。